

促成イチゴの苗床 N 施用量 について

永松栄子・下原孫一・岩本保典
(大分農業技術センター)

NAGAMATSU, E., SHIMOHARA, M. and IWAMOTO, Y.

Effect of the Nitrogen Application to Strawberry Seedling in Forcing Culture

イチゴの促成栽培では、苗床のN施用量の調節や断根により苗のN吸収量を抑制して、花成の促進を図っている。この場合、苗床N施用量の違いによって開花期が不安定になる傾向が見られるので、苗床N施用量と頂花房の開花及び早期収量との関係を明らかにし、施用適量を知るため‘宝交早生’を用いて試験を行なった。

試験方法

試験 I 供試苗は、7月25日採苗の本葉 2.5枚展葉したものを、縦60cm、横35cm、深さ15cmのトロ箱に10株植とした。処理は、苗床N施用量がa当たり0.0kg, 0.5kg, 1.0kg及び2.0kgの4区を設けた。育苗中は、常に本葉4枚として摘葉した。8月下旬にトロ箱の中で断根し、定植は9月20日に行なったが、本ほでの施肥は同一とし、慣行に従って栽培した。

試験 II 試験 I と同様7月25日に採苗し、慣行育苗法でのN施用量について検討した。苗床N施用量はa当たり0.0kgと1.0kgの2処理とした。8月25日にブラシを行ない、本ほでの栽培は試験 I に準じて行なった。

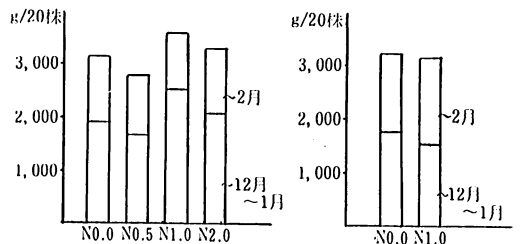
結果及び考察

試験 I 苗の生育は、N0.0区<N0.5区<N1.0区と増加し、N2.0区では抑制された。苗のN濃度は、N施用量に応じて高くなった。出らい始めと開花始めはN0.0区が最も早い傾向が見られたが、早期収量(12~1月)では、N1.0区<N2.0区<N0.0区<N0.5区となっ

た。なお、N0.5区の減収は、出らい時の未展開葉の葉やけ症状によるものと思われる。

試験 II 苗床での生育は、N1.0区>N0.0区となり、ブラシ後の生育は区間に差がないが、苗重についてはN1.0区>N0.0区の傾向を示した。開花始めは、N1.0区が11月9日、N0.0区が11月7日で2日早かったが、開花そろいは余り差が見られなかった。収穫始めは12月13日で処理による差は判然としなかった。早期収量ではN0.0区>N1.0区であったが、2月までの総収量では差がなかった。

以上のことから、苗床におけるN施用量が少ないほど苗のN吸収が少なく、開花時期を促進させる効果が認められたが、苗の生育はN1.0kg/a区が最もよく、12~2月の収量も多収を示した。このことから、‘宝交早生’の苗床におけるN肥は、花芽分化促進、及び早期収量の安定のために、1.0kg/aまでは施用してもよいと思われる。



第1図 収量(試験 I) 第2図 収量(試験 II)

第 1 表 苗 の 生 育 と N 濃 度 10株平均

月 日 区 \ 項目	8 月 24 日						9 月 19 日					
	葉長	葉幅	葉柄長	新鮮重	乾物重	N濃度	葉長	葉幅	葉柄長	新鮮重	乾物重	N濃度
	cm	cm	cm	g	g	%	cm	cm	cm	g	g	%
N 0.0	7.3	5.7	11.5	8.5	1.79	1.96	7.4	5.6	13.6	9.9	2.66	1.46
N 0.5	9.2	6.7	13.7	12.6	2.62	2.54	9.5	7.0	15.1	14.7	3.94	1.46
N 1.0	9.4	7.1	14.7	14.2	2.71	2.97	9.7	7.2	15.9	19.2	5.04	1.63
N 2.0	8.5	6.3	13.8	11.9	2.33	3.05	8.8	6.6	14.1	17.0	4.55	1.77

注) N濃度は葉身の乾物%